

# 文法をやさしく

ぶん ぼう

## 第1回 受身 (1) NはNにVられる

だい かい うけ み

## NはNにNをVられる

### 学習段階：初級後半

がくしゅうだん かい しよきゅうこう はん

### キーワード：ヴォイス・受動態・有情の受身・視点

じゆ どうたい ゆうじょう うけ み し てん



今回から新しいコーナー『文法をやさしく』が始まりました。初級を教えている教師のみなさんが、授業の前に文法のポイントを整理したいとき、このコーナーを役立ててください。また、日本語を勉強しているみなさんにも、このコーナーで日本語の文法を好きになっただければと思います。

上のカードに、文型のモデルと、その学習段階を書いておきました。キーワードは、コンピューターや本のインデックスで調べるときに使ってください。

本文では、毎回、はじめの例で各回のポイントを考えます。ポイントがわかったら、詳しい説明といろいろな例文を見てください。これらの例文はできるだけ学習段階に合うように作ってあります。

もっとくわしく知りたい方にはこのコーナーの最後に紹介する本が役に立つでしょう。

さて、第1回と第2回のテーマは受身です。まず、実際に受身が使われている例を見てみましょう。

その日、おじさんは考えごとをしながら、道を歩いていた。と、背後からいきなり車の警笛を鳴らされた。「ブーン!!!」

突然の大音響に、驚いたの何のって、心臓が止まりそうだった。

（飛鳥圭介「おじさん図鑑」1.1-8  
東京新聞 2001年9月9日）



背後から.....後ろから いきなり.....急に、突然  
警笛.....車の horn 大音響.....大きな音  
驚いたの何のって.....非常にびっくりしたときの表現

この文章は、ある中年の男の人から見た日本の社会を描いたユーモア・エッセイの書き出しの部分です。

おじさんの背後からいきなり鳴った車の警笛で、おじさんはどうなってしまいましたか。毎日、警笛はいろいろなところで鳴っています。おじさんもこれまでに何度も聞いたことがあるでしょう。それをいつも受身で表しているわけではありません。なぜ、この日の警笛は受身で表したのでしょうか。それは、この警笛を聞いて、心臓が止まりそうなくらいびっくりしたからです。

今回は、あるできごとから、迷惑や驚き、残念さ、はずかしさなどを感じた人（上の例では「おじさん」）に

視点を置いて作る受身をまとめてみましょう。

受身形の作り方を復習しておきましょう。

- 1 グループの動詞（五段動詞）：ない形+れる
- 2 グループの動詞（一段動詞）：ない形+られる
- 3 グループの動詞（来る、する）：こられる

受身文のかたちは次のふたつです。

あ.(N1は)N2にV(ら)れます。

い.(N1は)N2にN3をV(ら)れます。

それでは、受身文と普通の文をくらべてみましょう。

1 わたしはとなりの子にガラスをわれました。

2 うちの子がガラスをわかりました。

1 も 2 も同じできごとから作られた文ですが、話し手（この文を作った人）が何を中心に見ているかが違います。これを視点の違いということにしましょう。1 の視点はわたしにありますが、2 の視点は、うちの子にあります。言いかえると、1 の文はわたしについて話していますが、2 の文はうちの子について話していると言えます。普通の文では、動作をした人に視点がいますが、受身文では、動作の影響を感じた人（そのできごとについて感じた人）に視点が置かれ、その人が主語になります。次の 1' の文も視点はわたしです。日本語ではわたしが主語になるとき、言わないことがよくあります。言わなくても文脈から主語がわかるからです。

1' となりの子にガラスをわれました。

このように受身文では主語に立った人の気持ちが表れることがあります。1' 1' ではとなりの子にガラスをわれた人の不愉快な気持ちが表れています。多くの場合、話し手が自分の感情を表すために自分に視点を置いて（自分を中心に見て）受身文を作ります。



ほかに、どんな動詞を受身文でよく使うか、見てみましょう。たとえば、笑う／たのむ／しかる／ほめる／さそうなどです。例文 3 ~ 7 を見てください。それぞれ主語のわたしに視点が置かれていることと同時に（ ）の中の気持ちも表れています。

- 3 友だちにわられました。（はずかしい）
- 4 マリさんに買い物をつたのまれました。（ちょっとたいへん）
- 5 先生にしかられました。（いやだった）
- 6 先生に作文をほめられました。（うれしい）
- 7 山田さんに食事にさそわれました。（うれしい／こまった）

中には 7 のように文脈がないと、どちらの気持ちかははっきりわからないものもあります。このような場合は、もし、いやな気持ちだったら「～てしまう」を後ろにつけるとわかりやすくなります。

また、この他に次のような文では（ ）の中の気持ちが表れます。

- 8 電車の中で足をふまれました。（いたかった）
- 9 犬に手をかまれました。（いたかった）
- 10 子どもにカメラをこわされました。（こまった）

11 背後からいきなり警笛をならされました。（びっくりした）

次の場合、どろぼうはどこに入ったのでしょうか。

- 12 どろぼうに入られました。（こまった）
- 13 どろぼうが入りました。

13 ではどろぼうがどこに入ったのかわかりませんが、12 では、話し手のうちに入ったということまでわかります。

参考文献

西口光一（2000）『基礎日本語文法教本』p.152-157 アルク  
友松悦子、宮本篤、和栗雅子（1997）『どんなときどう使う日本語表現文型 200 初中級』p.184-192 アルク  
文化外国語専門学校（1990）『文化初級日本語 教師用指導手引書』p.90-92 凡人社  
文化外国語専門学校（2000）『新文化初級日本語 教師用指導手引書』p.136-137  
松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』p.292-299 スリーエーネットワーク

このコーナーについてご感想やご質問があれば送ってください。

担当：荒川みどり（日本語国際センター客員講師） 木山登茂子（日本語国際センター専任講師）